

## あの人の本棚

## 丘山新 Hajime OKAYAMA

東京大学東洋文化研究所 教授

気になるあの人の本棚を拝見し、お気に入りの本にまつわるお話を伺うコーナー、「あの人の本棚」。本号の表紙を飾ったのは、丘山新教授の本棚です。中国仏教の専門家であり、また広く仏教における「他者」と「共生」について思索し続けている丘山教授に、おすすめの三冊を選んでいただきました。



## 丘山教授に聞く、今読まれるべき本。

最近一年くらいの間で一番良かったのは、『愚の力』ですね。お世辞ではなくて（笑）。あの本で大谷光真ご門主は、人間中心主義を批判しているんだと思います。もっとも、環境問題など踏まえた現代的な非人間中心主義は、いろいろな所で言われていますが、そうではなく、自分というものに囚われないという、根本的な意味での人間中心主義からの脱却を示しているのだと思います。それで、この本は真宗っぽくないと言うか（笑）、教学的、あるいは形而上的な答えは、最後まで出てきませんよね。どうも伝統仏教は現実の問題に疎いという一般的なイメージがあるけれど、この本でご門主は、現代の社会的な問題、倫理的な問題にたいして、極めて明確な問題意識を持っています。ですから、この本はいろいろなイデオロギーを超えて、広くおすすめできる本だと思います。

最近の本ではないですが、おすすめしたいのが亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』。あの本は、奈良のいろいろなお寺の紹介もいいのですが、所々に出てくる著者の仏教理解が、大乘仏教の大事なエッセンスを非常によく捉えていると思います。同じような観点から、武者小路実篤の『維摩経』の翻訳も素晴らしい。仏典の現代語訳では最も優れたものの一つだと思います。どちらも学術的というより主観的な理解で仏教を捉えているのですが、もともと物を書く人のセンスなのか、仏教の一番のエッセンスになる部分を見抜いていると思いますね。

中国で経典が漢訳されていた現場では、外国語や教理に通じた人々が作った翻訳を、最後に「潤文」と呼ばれる文章家が手直ししていました。現代においても、研究者と作家が協力して本を作る、ということがあっていいと

思いますね。

今村仁司さんの『親鸞と学的精神』もおもしろかったです。宗教者が現世の問題にどう対処するか、どう生きるかという視点から、『教行信証』の「化身土巻」が重要だということを述べていて、非常に興味深かったですね。ただし、あの本では未だ大粹の提示に留まっていると思います。ご存命であれば、より踏み込んだ議論が読めたのにと考えると、非常に残念です。それから、竹内整一さんの『『かなしみ』の哲学』もおもしろかったですね。「おのずから」と「みずから」のあいまいなことを述べているのですが、それは、自力でもがく部分と「おのずから」の力があって、人間の力には限界があるという「かなしみ」とその力が会おう、その場所こそが真に宗教的なものなのだ、ということですね。

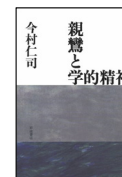
竹内さんの述べていることはご門主や今村さんと共通すると思うんです。自力には限界があるとしても、最初からその悪あがきを放棄しては駄目なんだ、ということですね。「阿弥陀様の力によって生かされている」という考え方は一つの完成したものですけど、そう受け取った僕たちが現実にはどう生きていくのか、どう実感していくのか。皆さんその辺りのことを考えているのだと思うのです。そういった思索を、僕はおもしろいと思いますし、僕自身も考えていきたいですね。（聞き手●日野慧運）



『愚の力』  
大谷光真 著／文芸春秋社（文春新書）／2009年／819円  
「愚」をキーワードに、西本願寺24代門主が、宗祖・親鸞の教えをわかりやすく説く。



『大和古寺風物誌』  
亀井勝一郎 著／新潮社（新潮文庫）／1953年（改装版）／420円  
古都・奈良の仏教文化の跡をたどる名著。



『親鸞と学的精神』  
今村仁司 著／岩波書店／2009年／2940円  
親鸞思想の現代における可能性を切り開く社会哲学的考察。著者の絶筆。

おかやま はじめ●1948年生まれ。1976年東京大学大学院修了。1994年より東京大学東洋文化研究所教授。研究活動として、「漢訳仏典の受容をとおりして、中国文化の時代思潮を明らかにする」、「大乘仏教思想に基づき、他者・共生論を宗教哲学理論として創生する」ことを目指す。著書は多数あるが、近著に『菩薩の願い—大乘仏教のめざすもの』（NHKライブラリー）、『アジアの幸福論』（共著、春秋社）など。